



切れ長の目を固く閉ざして、肉体を震わせる詩織の耳になにかが、機械的ななにかの音が聞こえた。冷めた金属音に詩織は潤んだ目を見開く。そして。

「んおっ！」

快感に緩んだ詩織の顔が、一瞬にして強張った。画材を抱えていた中年男が笑いながらなにかをしている。男が握っているのは……。

——デ、デジタルカメラ！

詩織はあわてる。スカートをまくられ、大股をひろげて、さらには、囃らずも女悦に顔を紅色に染めるその瞬間を撮影されたのだ。

「せつかくですから、記念にと思ひましてねえ……」

中年男はそう言つて、再びシャッターを切ろうとする。

——だ、だめッ！　だめよッ……こ、こんなところを、こんなところを撮影しないでええッ！

詩織はバタバタと身体を前後に揺する。まさに女の尊厳を守るための最後の抵抗であつた。

だが、どれほど力を振り絞つても、詩織は体格のよい男と蛇のようなエセサラリーマンによる二人がかりの拘束から逃れることはできなかつた。

「先生、いいわよ……元気な人は私も大好きなのよ……」

蘭子はそう言うのと詩織の陰核に指を押しつけ、それまでにない激しさと強さでもって敏感なアワビの頭の部分を指圧した。

ぐりぐりぐりぐりっ！

「んおッ！」

痛撃をもらった詩織は白目を剥いてのけぞる。まるで電撃のように切ない陰核の刺激。カシャツと小さな機械音が響き、詩織のベストショットが撮影されてしまう。

「ふふふ……。先生、いい反応じゃないですか……」

詩織の足首を握る蛇の目をしたサラリーマンが言った。詩織は称賛を聞いていない。敏感な肉芽を下から押しつぶすような刺激に煽あおられて、それどころではないのだ。

——あ、ああ、そ、そこを、そんなに……そんなに、そんなにされたら……。

詩織の切れ長の目尻には涙が浮かんでいる。陰部を強く指圧される心地よさによって詩織は人事不省の一步手前にまで追いこまれ——そして、責め手の側は詩織をさらに苦しめる。どこまでも高く、遠くに弾き飛ばす。蘭子を筆頭に肉責めの痴漢たちは、詩織が頂点に達するまでは絶対に拷問しごもんをやめるつもりはないのだ。

「そろそろ……いいかしらねえ……」

女はそのように言うのと、詩織の穿^はいているパンストに手をかけた。

詩織は自分が窮地にあることを知らず、ぼんやりしている。否、仮に、詩織がすべてを理解していたとしても、彼女にはなにもできなかつただろう。

「先生の大事なところもそろそろ、息が苦しいみたいよ……。外の空気を吸わせてあげたほうがいいんじゃないかしら……ねえ？」

蘭子は一瞬だけ詩織の陰核揉みの手をとめると、詩織が穿いているパンストをその下のショーツもろともにずりりと膝まで引きおろした。

「……ん、んおッ？」

教え子の下着を唇の奥につめこまれた詩織は、自分の股間が剥きだしにされて、二瞬ほどしてから、初めてなにが起こつたのかを理解した。

——し、下着が、下着が……。

燃えあがり、真つ白になった脳幹に寒気が襲ってくる。屋外、それも列車内で強制的に下着を剥ぎ取られて、股間を露出する。詩織にとっては、当然に初めての屈辱であつた。

「ん、んおッ！　んおおッ！」

詩織は必死に顔を左右に振った。だが、彼女ができるのはそこまでであつた。

「じかに揉んでもらったほうが気持ちいいよ、先生……」

教え子と同じ年代の若者に笑われた詩織であるが、恥ずかしさに心臓を打ち抜かれた彼女の耳には、若者の笑い声は聞こえていない。

——ああ、いやよ、いやッ！ いやッ！ こ、こんなところで……こんなところで、股間を……股間を……。

締まった腰肉。白い肌、へその下から滑らかにつづく詩織の下腹部が剥きだしとなった。赤味が差しているのは夕日の照りかえしもあるが、恥じらいによるものでもあったろう。そして。

「うふふ……。ぼーぼーじゃない……。先生、恋人いないんでしょう。だめよ、いつ、ここを見せることになるかわからないんだからさ」

蘭子は笑って言った。ホームベースのように五角形にひろがる詩織の茂み。あまり手入れのよろしくない陰部の毛は蘭子による苛めいぢによって興奮し、激しく逆立っている。

「見て、この毛……。うふふふ……。こんなに伸びちゃって……。大事なところのまわりもこんなに汚い……」

マッサージ女は詩織のことを優しく嘲った。怒りと屈辱に詩織はただ嗚咽おえつするばかり

り。

「ん、んおお、んおッ……」

「いい感じだな……」

筋肉質な大男がエビ反りになっている詩織を見おろして呟き、蘭子も応じる。

「……貴一、剃りたいんじゃない？ あんた、女の毛を剃るの好きだもんねえ……私も大好きだけれどねえ……」

蘭子はそう言って、詩織の陰部に再び指を這わせる。大柄な男の名前はおそらくは貴一。だが、そのときの詩織にとっては、相手の名前がどのようなものであるかはどうでもいいことだった。

「ショーツが白なんであんまり目立たなかつたけれど……見て、こんなに濡れているわよ……」

蘭子はぐりぐりと詩織の陰部を指でさすって、その中心に噴出していた雫をすくいあげる。ねっとりとした熱いエキス。まぎれもなく詩織自身がたれ流してしまった淫汁であった。

「ずいぶん粘るわね……」

蘭子は中指と親指で詩織の肉汁の粘り具合を確かめて、仲間に見せる。